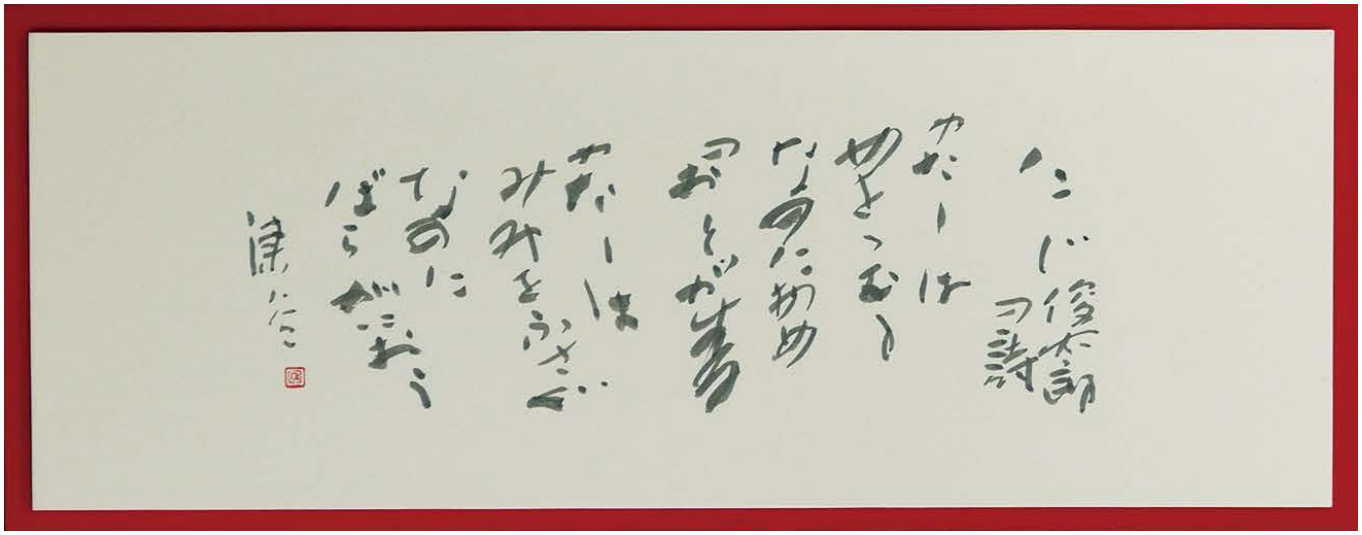
なごや文化情報

2025
Spring

No.413

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／ギャラリーラウラ
特集／2024　1年をふりかえって
令和6年度 名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞
#zoom up／〈オレンヂスタ〉座付き作家・演出家 ニノキノコスターさん



公益財団法人 名古屋市文化振興事業団

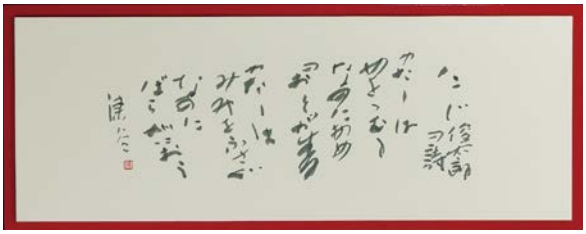
2025
Spring

表紙

「にじ　谷川俊太郎の詩」

（2024年／和紙［鳥の子紙］、松煙墨）

谷川俊太郎の詩「にじ」の一節を書いた。「人間の五感で解かる書を書きたい」という自分の気持ちに合う詩だった。紙面に広がる空気感を大事にしたいと思う。



原田凍谷（はらだ とうこく）

1986年　高崎市立高崎経済大学卒業
2021年　個展「書の自然観」
（セントラルミュージアム銀座／東京都）
2022年　第35回毎日書道顕彰 芸術部門 受彰
2024年　令和5年度愛知県芸術文化選奨 文化賞 受賞
ウェブサイト　https://toukousha.com

Contents

Pick Up Gallery　ギャラリーラウラ …… 2
2024　1年をふりかえって …… 3
令和６年度 名古屋市芸術賞 …… 8
令和６年度 名古屋市民芸術祭賞 …… 9
＃zoom up　〈オレンヂスタ〉座付き作家・演出家
ニノキノコスターさん……10

「なごや文化情報」編集委員
杵屋六春（長唄･唄方 名古屋音楽大学講師）
桐山健一（舞踊･演劇ジャーナリスト）
黒田杏子（ON READING）
鈴木敏春（美術批評･NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
濵津清仁（指揮者）
望月勝美（編集者･ライター）

Pick Up Gallery

ギャラリーラウラ

ギャラリーラウラ外観

ギャラリーラウラは、名古屋市名東区に隣接した日進市香久山に1995年にオープンしました。通りに面して全面ガラスを採用しているため、自然光で作品を鑑賞することができます。窓から差し込む光は時間と共に変化して、前庭の木立の影が床に映り込み、作品が光と影に呼応して動くかのように思えるひと時が出現します。入口近くにある曲面の壁の存在も特徴の一つと言えるかもしれません。アートが普段の暮らしの中に潤いをもたらしてくれるようにと願いながら、絵画、彫刻、陶器やガラスのクラフト等ジャンルを問わず、現在活躍している作家たちの作品を中心に展示しています。住宅地にあるギャラリーとしてどうぞ気軽に覗いてください。

設　立　1995年　代表　籾山 純子
住　所　〒470-0134　日進市香久山1-2810
電　話　052-805-7930

取り扱い作家　あらかわ佳子、大塚くるみ、近藤純一、近藤依子、永井小百合、松山美恵、原歩、吉田友幸　ほか
ウェブサイト　http://gallerylaura.com

2024 1年をふりかえって

洋　舞　上野茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）

2024年も、東海地区の洋舞公演はBALLET·NEXT「INNOCENT GRAY Day of Tears」（1月6日～7日·名古屋市芸術創造センター）からスタートした。映画「エレファントマン」のモデルになったジョーゼフ・メリックの凄惨な物語。3度目の再演になるが、見る度に心を揺さぶられる、奇才・市川透の力作である。あなたは重度の皮膚病に侵された人物を正視できるのか―。醜悪な外見に覆われた知性や人間性を見極めることができるのか―。舞台の奥から客席に向け放たれた強い照明に、そう問われた気がした。3公演トリプルキャストで、私が観劇した初日は、主人公を長友麻衣花、彼女を支え続ける医師を梶田眞嗣が演じた。

BALLET・NEXT「INNOCENT GRAY Day of Tears」（撮影・テス大阪）

当地の現代舞踊界をリードする倉知可英が、志を同じくするダンサーらを迎え「ナゴヤ・ダンス・シーンvol.10」（4月20日・千種文化小劇場）を開いた（以下、NDS）。発表の場の少ないダンサーたちのために、過去9回にわたり倉知のスタジオで行ってきたNDSの集大成にして最終回である。倉知は全国的にも有名なヒップホップダンサーKOUと共演。生命の誕生～成長を幻想的に描いた。現代舞踊とコンテンポラリーの魅力を兼ね備えた斬新な公演だった。

岐阜県に拠点を置く舞踊団だが、傑出した創作作品とダンス力で全国的に高い評価を得る「かやの木芸術舞踊学園」にも触れておきたい。同団は3月に東京で開催された「第81回全国舞踊コンクール」の現代舞踊、群舞、児童舞踊の3部門で第1位を獲得。参加した8作品すべてが入賞、入選する快挙を成し遂げた。7月に開催された「第28回舞踊公演」（7月14日・土岐市文化プラザ）では、その8作品が披露された。オリンピック体操選手並みのダンステクニックを備えたジュニア、シニアのダンサーたち、人間愛に満ちた作品群。その圧巻のステージに幾度も胸が熱くなった。

現代舞踊協会中部支部の「ダンスパラダイス」（9月16日・千種文化小劇場）では、新人4組を含む14組がオリジナリティーを競った。新人グループは、いずれも高い身体能力を発揮。一般グループでは服部由香里が彼岸花を題材に作舞、13人のダンサーが心象的な群舞を繰り広げた「Impression～おもいのりんのひがんばな」が興味を引いた。圧倒的なダンス力、構成、振付で群を抜いたのが苅谷夏の自作自演作「赤と黒のアダージョ」だ。あまりにドラマチックで情感のこもったダンスだった。メンタルとテクニックが合致すると、ダンス芸術はここまで昇華する―。それを実感した名舞台だった。

苅谷夏「赤と黒のアダージョ」（撮影・水谷友也）

暮れには三代舞踊団が「第34回クリスマス定期公演」（12月22日・名古屋市青少年文化センターアートピアホール）でジャズダンスの本領を発揮。松岡伶子バレエ団が「騎兵隊の休息」、「ライモンダ」、創作「Labo」の「トリプル・ビル」（12月8日・日本特殊陶業市民会館ビレッジホール）を公演。越智インターナショナルバレエは恒例の「くるみ割り人形」（12月26日・日本特殊陶業市民会館フォレストホール）を公演した。

演　劇　小島祐未子（編集者・ライター）

少年王者舘の天野天街が7月に他界。しかし劇団員は直後の「それいゆ」4都市ツアーを完走した。「それいゆ」（仏語で太陽、ひまわりの意）の題名のごとく、天野の重要な主題〈生と死〉が放射状に飛び散るような感覚に襲われる同作は、帰還中の少年兵とその家族を軸に、二度の原爆投下、慎太郎と裕次郎の兄弟、猛獣に二度噛まれた松島トモ子など昭和の歴史・風俗史が絡み合って展開。それらを「ふたつの太陽」と見立てる趣向が面白い。半面、天野の怒りや悲しみ、やるせなさが強くうかがえて胸が塞がれる。生まれてきたのに必ず死を迎える命の不条理。「それいゆ」は眩しくて見えなくて闇に近づく現象を表現した作品だが、闇=死と同様、人間の生の輝きも星々に比べれば一瞬でしかないと思い知らされる。

少年王者舘「それいゆ」
（7月11日～14日七ツ寺共同スタジオ）（撮影：羽鳥直志）

ささしまスタジオ主催「オイスターズがささしまライブの公園でつくる野外劇」は果敢な作品だった。作・演出の平塚直隆たちが立ち向かったのはビルや道路に囲まれた街なか。周辺は人の往来が可能で、野外劇というより市街劇の様相だった。使用条件の都合で音響はなく、俳優は地声で会話を繰り広げ、歌でも盛り上げる。360度回転式の客席も人力で動かしており、ギリシャ劇に通じるような演劇の原点が随所に見られた。題材の「ドラゴンクエスト」も親しみやすく、企画全体が演劇と地域、双方の活性化に新たな方法を示した。

「オイスターズがささしまライブの公園でつくる野外劇」
（９月17日～23日ささしまライブ内１号公園）

「夫婦パラダイス～街の灯はそこに～」は北村想がシス・カンパニーに書き下ろした一種の商業演劇だが、実験性と大衆性が絶妙で興奮した。織田作之助の「夫婦善哉」をモチーフに、尾上松也と瀧内公美が主人公の男女を演じる舞台では現実と幻想が交錯。一筋縄ではない芝居ながら、北村と旧知の間柄の寺十吾の演出も冴え、客席は終始好反応。終幕は拍手喝采だった。作り手に信念があれば複雑な味わいの作品にも観客は応えてくれると改めて実感できたのは収穫だ。

子どものための舞台作品「ひかりとかげ」、音楽劇「マハルコ組曲」は劇場のアクセシビリティを巡る課題にも対応していた。「ひかりとかげ」はメニコン シアターAoiの芸術監督・山口茜による新作。科学実験や観客参加の要素を取り入れた舞台に子どもたちは大喜びだった。一方、春日井出身・中島弘象の原案著書「フィリピンパブ嬢の社会学」を舞台化した「マハルコ組曲」は、東京を拠点に活動する有田あんの脚本・演出ではあるが、公演は名古屋のみで当地の俳優も出演。フィリピン人の観客も多数来場し、涙していた。子ども、子育て世代、在日外国人など、劇場に足を運び難い人も演劇体験ができる場は今後も必要だろう。

2024年3月に行われた公開審査にて16号室／room16の八代将弥a.k.a.SABOが若手演出家コンクール2023最優秀賞に輝いた。受賞作「演出家コンクール最優秀賞受賞予定作品」は稽古風景を題材にした虚実ない交ぜの世界で観る者を驚かせた。また上演自体は2023年だが、廃墟文藝部の斜田章大が「4047（ヨンゼロヨンナナ）」で11月に発表された第30回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。次世代のエースたちが確実に評価を高めた。

洋　楽　早川立大（音楽ジャーナリスト）

三井住友海上しらかわホールが2月末で、30年にわたる音楽専用ホールとしての役割を終え、閉館した。会社の経営上の都合によるもので、音響抜群のここを本拠に活動していた地元音楽家たちの惜別コンサートが相次いだ。その中では、福本泰之ら教授陣の指揮で活力あふれる演奏を繰り広げた愛知県立芸術大学の弦楽合奏第18回定期演奏会（1月17日）、ピアニスト北村朋幹が初めて指揮を兼ね、モーツァルトやラヴェルのピアノ協奏曲を見事に弾き振りした名古屋フィルハーモニー交響楽団（以下、名フィル）のしらかわエクスプレス第4回「北村朋幹の世界」（2月9日）を挙げておく。

名フィル　しらかわエクスプレス第４回「北村朋幹の世界」
（２月９日三井住友海上しらかわホール）（撮影：中川幸作）

［声楽］オペラは全体に低調だった中、セントラル愛知交響楽団（以下、セントラル愛知響）が愛知県芸術劇場コンサートホールを会場としてオペラハイライトシリーズを開始した。第1回のプッチーニ『トスカ』（6月9日）、第2回のヴェルディ『椿姫』（10月6日）ともに4月から音楽監督に就任した角田鋼亮が指揮、優れた歌手陣を得て楽しめた。

リサイタルでは加藤佳代子ソプラノ・リサイタル「Time & Fate 時と巡合」（12月5日、宗次ホール）が印象に残る。ジョン・ダウランドら17世紀前半の西欧作曲家たちの歌曲をリュートに伴われ、ヴィブラートのない澄み切った美声ですっきりと歌って出色だった。

加藤佳代子ソプラノ・リサイタル（12月５日宗次ホール）

［器楽］名古屋に本拠を置く3つのオーケストラの活動が目覚ましい。名フィルは名誉音楽監督の小泉和裕が室内楽的なモーツァルトのディヴェルティメントK.334と大編成のチャイコフスキーの交響曲第4番を振り分けた第526回定期公演（9月13日～14日、愛知県芸術劇場コンサートホール）、セントラル愛知響では名誉音楽監督レオシュ・スワロフスキー指揮によるスメタナの連作交響詩「わが祖国」全曲の第205回定期公演（7月12日、同）、愛知室内オーケストラでは大家ゲルハルト・オピッツを独奏者に

得たブラームスの大作ピアノ協奏曲第1番と第2番の特別演奏会（12月4日、同）がいずれもずば抜けた出来栄えだった。

アンサンブルでは、この地方で活動する男性メンバーだけで結成された弦楽合奏団「Union“無頼派”」の旗揚げ公演が、カルウォーヴィチの弦楽セレナードなど珍しい作品を取り上げて話題となった（10月17日、電気文化会館ザ・コンサートホール）。逆に、名古屋音楽ペンクラブ賞の受賞者たちが出演してきた「音環」演奏会が10回目の今回でひとまず一区切りとなったのは寂しい（9月26日、同）。

室内楽集団レーベインムジークは進行中のシューマンの室内楽作品全曲演奏会の第5回から第7回までをこなし（3月10日、7月6日、12月24日、同）、ピアニスト石川馨栄子はラヴェルのピアノソロ作品を2回の演奏会で弾き切った（4月6日、9月28日、同）。両者とも高水準の出来だった。

能　楽　飯塚恵理人（椙山女学園大学教授）

2024年は名古屋能楽堂が4月から10月まで改修工事で閉館、やや寂しい一年であった。そんな中でも印象に残った舞台をいくつか紹介する。

1月21日名古屋能楽堂で、金春流による「日本全国能楽キャラバン名古屋公演」が行われた。金春穂高の《嵐山　白頭　働キ入リ》は、特に後ジテの蔵王権現がどっしりとした風格がありながら身体の切れがよく、ハタラキなど見ごたえがあった。後ツレの金春飛翔と金春嘉織の相舞もよく息が合っており、各人の日頃の修練の成果が遺憾なく発揮された。二曲目は《船弁慶　遊女ノ舞　替ノ出》。本田芳樹は前シテ静御前の序之舞が良く、後ジテ平知盛の霊は大将らしい風格を感じさせた。

「日本全国能楽キャラバン名古屋公演」《船弁慶》
（提供：公社金春円満井会、撮影：国東薫）

第29回「名古屋片山能」（3月9日、名古屋能楽堂）は片山伸吾の《巻絹》。片山のシテは神託を告げる巫女らしい威厳があり、神楽舞も美しかった。二曲目は片山九郎右衛門の《西行桜》。シテ謡は抑えた調子ながら口跡よく内省的で老木の桜の精に似つかわしかった。舞も典雅で美しく、春の夜遊の趣があった。

名古屋能楽堂の再オープンは11月2日の「やっとかめ文化祭DOORS」であった。狂言はやまかわさとみ氏作の《冥加さらえ》。井上松次郎、鹿島俊裕、今枝郁雄の三人が陽気な妖怪をおおらかに演じた。能はやはりやまかわさとみ氏の新作能《草薙神剣》。柏山聡子は大自然の力の象徴である八岐大蛇を切れの良い舞で表現した。衣斐愛は、特にミヤズヒメとして舞う場面に神話の姫らしい上品さがあって良かった。

「やっとかめ文化祭DOORS」新作能《草薙神剣》（撮影：工房円）

11月3日「第45回名古屋金春会」（名古屋能楽堂）は金春穂高の《竹生島》。特に後ジテが龍神らしい迫力にあふれていた。本田布由樹の《清経　恋ノ音取》。シテを呼びだす竹市学の笛が素晴らしく、朧なシテの姿が徐々にくっきりと見えてくる様を感じさせた。

11月17日の名古屋宝生会「雪待能」（名古屋能楽堂）は衣斐正宜の《楊貴妃　玉簾》。飯冨雅介は、いつもながらワキの位を保ちつつ口跡の良さに謹厳な雰囲気があって良かった。衣斐正宜は、優美な中に仙界での孤独がにじむ楊貴妃を好演した。

「雪待能」《楊貴妃　玉簾》（撮影：工房円）

二曲目は和久荘太郎の《女郎花》。こちらは風雅な雰囲気の前シテと地獄の責めを受けて苦しむ後ジテを上手に演じ分けていて好感が持てた。

名古屋能楽堂休館中、狂言共同社は栄能楽堂で「さかえ狂言御洒落会」を4月から10月までの毎月一回開催した。演目も《蝸牛》《瓜盗人》のようなポピュラーなものに加えて、《文蔵》《二千石》などの「語り芸」が主眼の狂言もあり、意欲的であった。若手の井上蒼大もしっかり舞台を勤め、狂言共同社の更なる発展が期待できる一連の公演であった。

また名古屋市文化基金事業「なごや子どものための巡回劇場狂言がやってきた」も健在で、8月20日の天白文化小劇場、8月22日の守山文化小劇場、それぞれ質の高い狂言を提供したことも述べておきたい。

邦楽・邦舞　北島徹也（CBCテレビ 調査役・金沢大学共同研究員）

西川流家元 西川千雅は今年も岡谷鋼機名古屋公会堂（名古屋市公会堂）で3回目の『名古屋をどりNEO傾奇者』（10/19、20）を開催、「名古屋ハイカラ華劇團」と題して、戦前戦後の二世鯉三郎の軌跡を重ねた。一方で今年は古典舞踊の会である『名古屋をどりCLASSIC』（3/23、24 御園座）も催し、〝日本舞踊も〟のエンタメ、〝日本舞踊を〟の古典という、西川流の両輪を見せた。千雅はまさ子、陽子と「雪月花」を舞い、鯉絵

『名古屋をどりCLASSIC』（3月23日　御園座）
「三社祭」（左から）西川貴美子、鯉粧、鯉絵

ほか「三社祭」と寿女司「傀儡師」、真乃女と京志郎「時雨西行」も印象に残る。西川流では前年春と秋に二つの表彰を得た真乃女がその記念公演として『しのじょ会華真』（4/14 日本特殊陶業市民会館（以下、市民会館）ビレッジホール）を催し、「三曲糸の調」と創作「蜻蛉比翼」で古典と創作の力量を発揮した。また、京志郎が新たに主宰となって「菊水会」（11/24 御園座）を催し「文屋」を踊った。亡き菊次郎へのよき追善である。

名古屋演劇ペンクラブ賞の記念公演『五條園美リサイタル』（3/18 名古屋能楽堂）で、園美が主宰する、流派・ジャンルを超えた芸能集団 創の会の作品から「夢の光芒ー平家物語より－」と、荻江節「八島」、ともに平家物語にちなんだ演目を披露し、さらに「続平家物語小品集」（12/14、15 名古屋能楽堂けい古室）では、創の会メンバーが立ち替わり駅伝のような奮闘を見せた。

「桜に舞う!～舞踊とともに～」（4/7 宗次ホール）で花柳朱実は、ショパンの「革命のエチュード」などをクラシックで見せ、名取55周年記念「朱ざくら會 朱実とひととき」（6/13 名東文化小劇場）で熟達の「藤娘」を舞った。「梅奈香会」（4/21 市民会館ビレッジホール）では「越後獅子」など子どもの活躍がみられ、花柳梅奈香は「鐘」で執念を、「助六」で侠客の闊達を表現した。

赤堀加鶴繪は『赤堀会』（5/26 市民会館ビレッジホール）で、創作「舞甘露」を豪奢に演じ、平安絵巻のような「華」を端正に舞った。

名残りが惜しまれるのは、舞納めに襟を正さしめるような「北州」での、工藤扇弥の舞台引退。『工藤会』（11/3 御園座）である。倉鍵は創作「天狐と蛇姫」でベリーダンスとの共演、寿々弥の更科姫と「紅葉狩」を出した。

稲垣舞比は山路遊子と「寒山拾得」を『豊美会』（7/21 市民会館ビレッジホール）で出し枯淡の境地を、友紀子は「おせん」の粋を表現した。

『内田会』（10/12 市民会館ビレッジホール）で、有美は家元の静かな気迫が備わった「廓八景」、寿子は粉雪の風情の「雪まんじ」だった。『明珠会』（2/23 名古屋能楽堂）での、山村楽乃『八島官女』は前半の牧歌風と後半のけなげさの対比が妙味である。『芸術鑑賞会』（9/23 市民会館ビレッジホール）で瑞鳳澄依は「天下る傾城」という古い変化所作事の一部を出した努力が佳い。「第41回芝流 芝の会」（11/2 御園座）で千桜こと西川牟喜幸は「神田祭」を京志郎と情趣たっぷりに。

工藤会（11月3日　御園座）
「北州」工藤扇弥

今後期待したいのは、「舞初会」（4/20 昭和文化小劇場）での、結noKAIというグループで、稲垣舞比、内田有美、工藤彩夏、五條美佳園、西川古祐、花柳磐優、結月櫻が選曲、振付、演出まで話し合った作品「春夏秋冬～結び、繋げる」に至る活動である。

長唄は、杵屋勝桃・勝千華『桃華の会』（5/19 天白文化小劇場）、杵屋見音代・見佳『見音代会』（6/1 八勝館）、杵屋六秋・六春『おやこ会』（11/9 今池ガスホール）などが催されたが、杵屋三太郎『杵三会』（11/24 日泰寺普門閣）では、三太郎襲名20年となることから歴代の三太郎とその門弟、関係者の追善法要も併せて行われ、また、三太郎は令和6年度名古屋市芸術奨励賞を受賞した。

名古屋市民芸術祭の伝統芸能部門で邦楽からは、「絃衣の会 佐藤亜衣 箏・三絃リサイタル」（11/14 電気文化会館ザ・コンサートホール）が特別賞となった。

美　術　安井海洋（十九世紀書物史研究 美術批評）

2024年には二人の中堅世代の作家が息を吹き返したかのような活躍を見せた。彼らが死に体だったと言うのではない。歩一歩と積み重ねてきたものが、今年になってブレイクスルーに達したのだ。復活者の清新さで、二人の作品は筆者の目に飛び込んできた。鈴木雅明と山田純嗣の二人のうち、鈴木についてはTEZUKAYAMA GALLERYが発行した個展の記録冊子への寄稿文で記したので割愛する。

山田純嗣は2023年まで文化庁の研修制度でフィンランドのユヴァスキュラに滞在し、銅版画家の石山直司より独自のドライポイント技法の教授を受けた。ドライポイントの特徴はニードルで銅版を直刻し、その際に生じる小さな「まくれ」を利用して線の周囲に滲みをつくりだす点にある。しかし石山のドライポイント技法は極細のニードルを使用するため、まくれが肉眼ではほとんど認識できず、かつ彫刻に時間がかかる。

これまで山田は名画を再現した立体を撮影し、インタリオ技法で大画面に転写するシリーズを展開してきた。しかし海外研修を契機に、今までとは打って変わった正統派の銅版画を発表する。AIN SOPH DISPATCHのグループ展「I want to see the other side of the scenery you saw」で公開した新作は、過去の大作に比べるとずっと小さく、一日に数センチ四方ずつ彫り進めていくのだという。描かれるのは雪のユヴァスキュラの森である。さきにこの技法ではまくれが肉眼でほとんど見えないと述べた。だが掌におさまる小さな画面のなかの、降り積もった雪の表面が冷たい微風にふるえるさまや、白樺の表皮のゆらめきは、

たしかに眼に触れている。見るのではなく眼で触れるというのが正しい極小の毛羽立ちに、自然物の精巧さに接したときに似た胸のふるえをおぼえた。

名古屋市美術館の「生誕130年記念 北川民次展」は、コレクションの柱である北川の作品を館外からも借用し、その事績を網羅した点で、同館による研究の集大成だといえる。メキシコ壁画運動のリアリズムに影響を受けた画風で想起されることの多い北川だが、全生涯の作品を通覧すると、時代ごとのムーブメントを積極的に取り入れる柔軟さと貪欲さを持っていたことがわかる。後半に示されたこどもたちの教育者としての側面も見逃しがたい。

山田純嗣
ISO-HAAPASAARI JYVÄSKYLÄ, FINLAND, OCTOBER（2024年）

愛知県美術館の「アブソリュート・チェアーズ 現代美術のなかの椅子なるもの」は、さまざまな形で現代美術に摂取された椅子の作品を提示することで、椅子と、腰かける私たちの身体について問いかける企画だった。ところで、本展には「障害と政治」という裏のテーマが見え隠れする。ダラ・バーンバウムの映像《座らされた不安》における自閉症者を連想させる常同行動を椅子の上で繰り返す女性の姿や、東大全共闘時の安田講堂内にいた渡辺眸が撮った写真集《東大全共闘 1968-1969》におけるバリケードにされた椅子、女性たちが議論する場で腰かけている椅子は、着座以外の使途や、対話の媒介としての役割など、椅子の多面性を示している。椅子は学校の教室のように人の行動を制約することもあれば、制約からの解放をもたらすこともあるのである。

「アブソリュート・チェアーズ 現代美術のなかの椅子なるもの」会場風景
（７月18日～９月23日愛知県美術館）（撮影：城戸保）

文　学　清水良典（文芸評論家・愛知淑徳大学名誉教授）

この地域に限らず地方の文化状況は年々地盤沈下が進んでいる。不景気を背景に有名な書店の閉店が相次ぎ、新聞や雑誌など紙のメディアも衰退の一途をたどっている。しかしこれはあくまで紙メディアを見た観測であり、ネット情報はいよいよ複雑巨大化し、SNSが社会コミュニケーションの中核となっている。あらゆる表現文化はそのような情報メディアの変化にアップデートできるか否かで、存続の命脈が決まるといってもいい。もろにその影響が顕れているのが文学である。

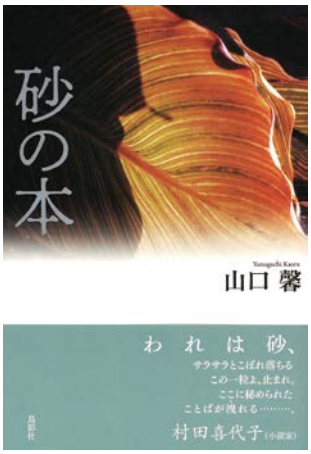
ここでは若い世代の実例として、1995年名古屋市生まれの現在大活躍中の作家、人間六度を紹介しよう。大学生のときに発症した白血病から立ち直った彼は、21年に「スター・シェイカー」（ハヤカワ文庫）でハヤカワSFコンテスト大賞を、同年「きみは雪をみることができない」（メディアワークス文庫）で電撃小説大賞メディアワークス文庫賞を受賞し、昨年は短編集『推しはまだ生きているか』（集英社）を刊行した。ひと口に作家といっても彼は漫画原作やノベライズ、ゲームやヴァーチャル楽曲とのコラボなども積極的にしていて、別にそちらが「副業」というわけではない。つまり小説と他ジャンルとの間の垣根が低い、というよりほとんど地続きにアーティスト同士が交流しているのである。名古屋市も、今後はそういう世代の文化に目を向けて振興を応援する必要があるだろう。

地域の文学に話題を戻そう。第37回中部ペンクラブ文学賞（以下、中ペン賞）の受賞者は、小森由美の「忘れ雪」だった。急病で母親を亡くした大学生の青年が、山形の母の実家へ心を休めに行き、雪に閉ざされた厳しい自然の中で縁者の優しさに触れて次第に立ち直る物語である。近親者の死を描く小説は数多く書かれているが、この小説はその欠落が若者の心をむしばむ経緯がじつに繊細に描かれている。それが昔戦争で兄を失った曽祖母の体験談とも連動して、世代を超えたスケールの大きな死の受容のテーマを浮かび上がらせている。小森の最新作「爪を切る音」（『弦』116号）も、夫に先立たれた女性が葬儀社の司会の仕事で、たまたま30年前に知り合った男と再会し、交際を始める作品である。喪失を抱えた熟年の心の機敏を掬い取る手腕は変わらず鮮やかだ。

他の同人雑誌掲載の小説では、北川朱実の「深夜保健室」（『文芸中部』126号）を挙げたい。北川は詩人として活躍中だが、小説も達者である。都会の繁華街に開業した個人経営の薬局の女性店主が、底辺で働く若者たちの愚痴や悩みに耳を傾け、ときには食事を振舞い、ジャズの名曲とプレイヤーの人生を語って聞かせる。そんな交流が薬局を雑踏の中の小さなオアシスにしていく物語である。

なお最近のニュースとして、中ペン賞の2017年受賞者である山口馨が、受賞作「駑馬」を含む作品集『砂の本』（鳥影社）を刊行したことを紹介しておく。地方でコツコツと純度の高い小説を書き続けた努力の結実である。

人間六度・著
『推しはまだ生きているか』／集英社



『砂の本』山口馨
装幀・装画　毛利一枝

令和6年度 名古屋市芸術賞

令和6年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

辻真先（つじまさき） 【文芸】

1932年名古屋生まれ。名古屋大学文学部を卒業し、日本放送協会（NHK）入局。以降、制作進行、演出、脚本、企画、制作などテレビ番組の全般に携わる。自身が初めて演出に加わった作品「バス通り裏」は人気を博し、ドラマ番組として菊池寛賞を受賞。その他にも数々の人気作品を手掛け、その演出作品は100本を超えている。

同局を退局後は、テレビアニメの脚本活動に注力し、「鉄腕アトム」、「エイトマン」、「サザエさん」、「名探偵コナン」などの国民的作品を数多く手掛けた。

執筆活動にも意欲的で、近年はミステリ作品など、名古屋を舞台とした作品を中心に名作を世に多く送り出している。1982年、日本推理作家協会賞長編部門の受賞をはじめ、以降も多数の賞を受賞。

御年92歳であるが、現在も現役で活躍中。長年の活動は当地域の文化芸術の振興に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。

芸術奨励賞

杵屋三太郎（きねやさんたろう） 【伝統芸能（長唄演奏）】

東京藝術大学音楽部邦楽部を卒業した後、2004年に名古屋を代表する長唄名跡である杵屋三太郎を六代目として襲名。

名古屋市民芸術祭審査員特別賞、第24回名古屋市芸術創造賞などの受賞実績もさることながら、児童への三味線教授活動、大学等での三味線講習など、後進の育成に余念がない。

代々の三太郎が集めた古典を紐解くことに軸を置きながら、2022年、長唄「恋の熱田（みや）めぐり」を作曲し、新たな楽曲の創作も積極的に行っている。

継承・主宰する一門会「杵三会」の30回記念では、熱田神宮にて同曲の奉納演奏を行い、熱田神宮の見どころや由緒が盛り込まれた歌詞を華やかで格調高く歌い上げた。

古典の保存はもちろん、若い世代への文化継承、新たな創作活動に取り組むそのひたむきな姿勢は、今後のさらなる活躍が期待される。

認定特定非営利活動法人ポパイ（にんていとくていひえいりかつどうほうじん） 【音楽・舞踊・美術】

2006年より市内で障がい者福祉支援・活動事業「オリーブ」を開所。生活介護事業などを展開しながら、アートや表現活動などを障がいのある人たちの仕事にすることを目標に「表現する仕事」を掲げ、国内外での作品展示や販売、出演、ワークショップの実施を行っている。大学や企業との連携も積極的に展開・拡大している。

福祉とアートの相乗効果に着目し、ダンスグループ、音楽バンドの活動を始め、創作活動を主とした事業所も開設した。「あいちアール・ブリュット展」に参加、第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会では企画運営にも携わり、2024年度からは、「愛知県障害者芸術文化活動普及支援事業（あしょげぶセンター）」を受託するなど、多様な芸術表現活動を社会に広める拠点的役割を担いつつあり、今後のさらなる活躍が期待される。

白樺八青（しらかばやお） 【その他（ボイスパフォーマー）】

名古屋演劇アカデミー第5期生として在籍中にミュージカル「ザ・ファンタスティックス」のオーディションに合格し、デビュー。「ザ・サウンド・オブ・ミュージック」で主役のマリア役を務めるなど、精力的なミュージカル活動に取り組む傍ら、音楽、演劇、文学、身体表現などの境界線をなくした「ボイスパフォーマー」としての活動を本格化させ、様々な形態で実施している。

また、人々の声と言葉を磨き、健康で自分らしい表現力を得るための自己解放を目指した「ことばのまなびや」を主宰。

出身地・守山区にて「守山の文化を考える会」を設立。同会にて企画した公演は2006年、名古屋市民芸術祭賞審査員特別賞を受賞。

芸術の芽を育てる感性豊かな取り組みと、地域の芸術文化の大切さを示し続ける活動に、今後のさらなる飛躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2024 名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。今年度は参加20公演（音楽9、演劇4、舞踊3、伝統芸能4）の中から部門ごとに、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（1公演）

【音楽部門】

金原聡子 ソプラノリサイタル ～乙女たちの願い～

●10月1日(火)　●電気文化会館ザ・コンサートホール

前半のリートでは、ミニヨンの詩に作曲した各国の作曲家のリートを歌うというコンセプトが明確で、曲に込められた想いを見事に表現した。後半のオペラアリアでは、明るく柔らかな透明感のある声質と、優れた高音域のコントロールで、時にパワフルに歌い上げるなど、表情豊かで聴き手を魅了する演奏だった。歌唱を深く理解するピアノ伴奏も好演で、準備、研究が花開いた素晴らしいリサイタルだった。

名古屋市民芸術祭特別賞（4公演）

【音楽部門】（和洋折衷エンタメ賞）

OpeRaku
落語オペラ「まんじゅう怖い」・「転失気」

●10月19日（土）　●北文化小劇場

落語とオペラの和洋を融合させ、子どもから大人まで世代を超えて楽しむことができるユーモア溢れるエンターテインメント作品に昇華した。配布物に漫画であらすじを掲載するなど、とにかく観客に楽しんでもらいたいという姿勢も功を奏し、会場が笑いに包まれた。作曲、音楽監督・指揮、台本、演出、出演と、全て地元発の見応えのある創作作品として、再演を重ね、より多くの世代に鑑賞されることを期待する。

【演劇部門】（精励賞）

なごや芝居の広場公演
「楽屋 ―流れ去るものはやがてなつかしき―」

●10月26日（土）、27日（日）　●千種文化小劇場

長年、名古屋の演劇界を支えてきたベテラン俳優陣が、それぞれの役柄に真摯に臨み、安定の出来栄えをみせる舞台だった。全国で上演される機会の多いチェーホフ作品に、敢えて真向からチャレンジする姿勢は評価に値する。一方で、円形劇場で上演することで試される空間の使い方や舞台セットの配置などには十分な工夫が見られず、今後の丁寧な舞台づくりに期待したい。

【伝統芸能部門】（名古屋伝承普及賞）

絃衣の会 佐藤亜衣 箏・三絃リサイタル
古典をみつめてⅡ～名古屋の遺徳～

●11月14日(木)　●電気文化会館ザ・コンサートホール

名古屋独自の組歌や曲を披露するというテーマが明確で、わかりやすい構成だった。また、箏、三絃、尺八による「尾上の松」は、見事な技巧で聴きごたえのある演奏だった。さらに、司会による解説やパンフレットが充実しており、伝統芸能を聴衆に丁寧に伝えようとする姿勢には好感が持てた。一方で、合奏での息の合わせ方などを課題として、一層精進し、感動を呼ぶ演奏への飛躍を期待したい。

【伝統芸能部門】（技芸継承賞）

公益財団法人能姫町財団
第二回 若獅子能

●11月30日（土）　●名古屋能楽堂

観世流の優美で洗練された型を、今後の名古屋の能楽界を牽引する若手能楽師たちが堅固に守り継ぐという姿勢が強く伝わる公演だった。能、仕舞、狂言が互いを刺激し合うことで生まれた緊張感が本公演を芸術性の高い舞台に昇華し、観客を魅了した。一方で、理解の手がかりとなる事前解説やパンフレットを用意するなど、伝統芸能の普及に不可欠な若者世代が気軽に触れられる取り組みにも期待したい。

#zoom up
ズーム・アップ

〈オレンヂスタ〉座付き作家・演出家

ニノキノコスターさん

フロンティア精神で培った、独自の表現を武器に

「名古屋大学劇団新生」で活動を共にした、主宰でプロデューサーの佐和ぐりこさんと共に、劇団〈オレンヂスタ〉を立ち上げたのは2009年のこと。近年、演出家・劇作家として躍進するニノキノコスターさんは、コンテンポラリーダンスやオブジェクトパフォーマンス、人形（ヒトガタ）を取り入れた作品創りに挑み続けている。'23年の日本演出者協会「若手演出家コンクール2022」では『「サトくん」のこと。』で最優秀賞を受賞するなど、これからの活躍もますます楽しみなニノキノコスターさんに、これまでの歩みと今後の展望について伺いました。

（聞き手：望月勝美）

クラシックバレエの経験を経て、演劇の道へ

ニノキノコスター（以下、ニノ）さんが本格的に演劇の道へと進んだのは高校時代。5歳から15歳までクラシックバレエを習っていた際に出演した『くるみ割り人形』の演劇的要素に興味を抱き、高校の先輩から演劇部に誘われたことで演劇人生が始まる。

5歳から10年間
「豊田シティバレエ団」に在籍し、
クラシックバレエを習得

「本当は小学生くらいの頃からずっと、精神科の医師免許を持ってる漫画家になりたかったんです（笑）。でも理系科目が得意じゃなかったし、高校の部活は化学部に入ったんですが、男子ばかりで馴染めなくて。うちの高校は6月に2日連続で文化祭と体育祭をやるので、演劇と展示と体育祭の応援とマスコット作りに分かれて、先輩達と縦割りのチームで準備をするんです。それで演劇を選んだら、そこにいた演劇部の先輩から『あなた面白いから演劇部入りなよ』と言われて『はい、入りまーす』って（笑）。高校3年生の文化祭では作・演出・出演をしましたけど、その頃はまだ台本を書きたいとかは全然なくて。それから高校を卒業して浪人中に、演劇部の先輩だった人が〈名古屋大学劇団新生〉（以下〈新生〉）に入って、『暇してるなら手伝ってよ』と言われたのがきっかけで劇団に入ったんです」。

出役から劇作・演出への転向、同志と共に〈オレンヂスタ〉結成へ

「〈新生〉でもずっと出役でしたけど、作・演出に転向する大きなきっかけが2つあって。当時は〈五反田団〉とかがグイグイきていた時代で、後輩のそれっぽいワンシチュエーション会話劇に出た時に、『"こんなこと私は思わない"っていうことは言えない。会話劇は無理』と気づいたのが1つ。それとその頃、名古屋学生劇団協会の事務局に出入りしていて、『大阪の〈デス電所〉の作・演出の竹内佑さんを招いて、名古屋と大阪の学生合同で2都市公演をやろう』ということになり、制作と出演をしたんです。そこで『私はこれが好きでこれが観たい、これがやりたい。けど、名古屋にはないから自分たちでやろう!』となったのが2つ目。

それで私が作・演出した作品で佐和ぐりこが舞台監督を務めたり、2作くらい一緒だったんです。『いつかまた、みんなで演劇やりたいね』と言いながら、1回ちゃんと社会を体験しよう、と就職して。佐和ぐりことルームシェアしてたんですけど、2、3年経ったある日、私の部屋のドアを開けて『ニノさん、演劇やろう!』と言ってきたので、『わかったわかった、やろうやろう』と。【来年の夏、演劇やります】と筆で書いて、やるからね! というのが〈オレンヂスタ〉の始まり（笑）」。

『犬殺しターくんと非実在チーちゃん』上演より
2013年３月／千種文化小劇場
作風変化のターニングポイントとなった作品

多くの出会いがもたらした、創作表現の転換期

それぞれ別の広告代理店に勤めていた当時、ニノさんはデザインとコピーライティング、佐和さんはディレクター職を担っていた。その経験が現在の活動に繋がり、自劇団のみならず他団体などの宣伝美術も多く手掛ける礎となる。こうして'09年に結成された〈オレンヂスタ〉は当初、パンクロック精神とポップさが融合するエキセントリックな作品を手掛けていたが、'14年頃に大きな転換期を迎える。

「'12年度に、12か月連続でUstream（ライブ動画配信サービス）公演をやって、七ツ寺共同スタジオ40周年記念公演『東京アパッチ族』（作：坂手洋二、演出：小熊ヒデジ）に演出助手として参加して、その翌年3月に〈オレンヂスタ〉の本公演を上演した時に、旗揚げからずっと"竹内佑イズム"でやってきたことを、あ、やり尽くしたな、と思ったんですよね。

そのあと演出家の木村繁さんから、『お前、活きがいいらしいな』と言われて、愛知県芸術劇場が主催する『AAF リージョナル・シアター2013～京都と愛知 vol.3～』の芥川龍之介特集に参加することに。京都の村川拓也さんが『羅生門』、私が『地獄変』の構成と演出をそれぞれ担当したんですが、村川作品を観て、こんな演劇があるんだ! と衝撃

を受けて。その直後にも『あいちトリエンナーレ2013 祝祭ウィーク事業』で、コンテンポラリーダンスカンパニーの〈afterimage〉と〈オレンヂスタ〉の合同公演として『サ××ド・オブ・ミュージック』を上演して。私は脚本だけだったんですが、演出と振付が〈afterimage〉のメンバーで、そこでも創り方の違いに驚いて、こんなやり方があるんだ! って。

やりたかったことをやり尽くしてしまって、これからどうしようか、と思っていた時にその2つの衝撃があって、その頃、横山拓也さんの戯曲講座に通っていたので横山さんに相談すると、『変わろう! ってなったなら、それはやっていった方がいいと思うよ』と言われたんです。それでもう、ゴリゴリのワンシチュエーション会話劇を書き、とはいえ〈afterimage〉ショックも受けているので、会話劇の内容と全く関係ないコンテンポラリーダンスのムーブも合わさった、白黒つかない作品が出来上がりました（笑）。

人形劇に魅せられて

そこから、人形劇界隈との縁が繋がるのは、木村繁さんのおかげです。当時『愛知人形劇センター』の理事長をされていたので企画会議の時に私を推薦してくださって、これも突然でしたけど、『愛知人形劇センターと飯田人形劇センターが大人向けの人形劇を共同制作するから、シェイクスピアで人形劇をやれ』と言われて。そのうちに企画が子ども向けに変わって、『シェイクスピアに、人形劇に、子ども向けって、3つとも全部やったことないねんけど! わ、わかりましたー!』って（笑）。それで『ひまわりホール』に来ている海外の人形劇を観るようになって、めちゃくちゃ面白いな、人形劇って可能性があるな、と。

そのあと初めて“パネルシアター”も観て、『なんだこのギミック、巨大なキャンバスでやったらどうなる? これだけ大きくて2次元なら漫画だな』みたいなとこから考えて『MANGAMAN』を創り、【P新人賞】（人形劇ジャンルの明日を担う斬新な才能を発掘するため『愛知人形劇センター』が開催している賞）を受賞して、これが演劇で初めていただいた賞です。それから人形劇『犀』（作：ウジェーヌ・イヨネスコ）の構成・演出や、『人形劇・寿歌』（脚本・監修：北村想）の演出を務めたり、自劇団でもそれ以外でも結構、人形やオブジェクトを取り入れた技法でやっていく感じになりましたね。

『犀』上演より
2020年１月／損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
フランスの不条理劇作家ウジェーヌ・イヨネスコの作品を
世界初人形劇化

あと、宮城聰さんとか鈴木忠志さんの系譜が好きで、いつか『利賀演劇人コンクール』に出たいと思って2回ぐらい観に行った時に、〈noism〉の金森穣さんとか、平田オリザさんとか、そういう方達が演出というものについて話していることを聞いて、『あ、演出家、演出ってこういうものなんだ』と学びを得たことが、技法とは別に演出家として育まれていった素地としてあります」。

仲間たちと共に歩んでいく、これから

こうして新たな出会いや課題、難題にもフレキシブルかつ意欲的に取り組み続けていったことで、〈オレンヂスタ〉を構成するメンバーもまた、新たな試みの鍛錬を重ね、徐々に技術が培われていったという。そのため近年は作品づくりの際、「先にいろいろ決め切らなくても、いろいろな可能性を試せるようになった」と。そして ’23年、こうした信頼するメンバー達と共に、日本演出者協会が主催する「若手演出家コンクール2022」最終選考に臨む。上演した『「サトくん」のこと。』は、’16年に起きた相模原障害者施設殺傷事件を題材に描いた作品で、野菜や果物、人形などのオブジェクトを効果的に用い、ニノさんが創作を始めた頃からの重要なテーマでもある社会的弱者を描いた作品で、最優秀賞受賞を果たした。

『「サトくん」のこと。』
「若手演出家コンクール2022」最終選考の前月、
’23年２月に名古屋「七ツ寺共同スタジオ」でも、
〈オレンヂスタ〉アラカルト公演の一作として上演された

「事件当時、『でも気持ちはわかるよ』というSNS上の声がすごく多くて、絶対的にやってはいけないことだけど共感を示してしまう差別性って、結局なんなんだろうな、と。私には障がいを持つ家族がいるので、『障がいのある人と自分』というテーマは昔から5〜6年に1回くらい取り組んでいました。これからも人形劇のジャンルは取り組むだろうから、それを組み合わせてみることでどうなるだろうか、というのが最初で、いろいろ試しながらコンセプトを固めていった感じです。

演出の技法として新しいアイデアをどこから持ってくるか、みたいなことはこれからも続けていくんですけど、この10年ぐらい本当に演出のことしか考えてこなかったので、回答を出せるルートはなんとなく定着してきているんです。なので、今は改めて劇作の方もちゃんとやっていかなきゃいけないな、と思ってます。自劇団の脚本を考える時は、モチーフになる場所を先に選ぶんですね。’20年に上演した『黒い砂礫』でK2（世界最難関の山）は描いたので、次は深海をやりたいな、と。深海をテーマにして、言語を用いるところと、ノンバーバルでそこだけ抜き出して海外にも持ってけるようなものをやれたらなぁ、と思ってます」。

令和7年3月25日発行(年4回6・9・12・3月の25日発行)通巻413号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP https://www.bunka758.or.jp/

Information

なごや文化は寄附でもつ

NAGOYA Culture Fund

名古屋市文化基金

支援・育成事業

― 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 ―

参加・体験事業

―市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 ―

鑑賞事業

――― 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 ―――

市民文化の情報発信

― 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 ―

皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および寄附のお申込みはこちら

ご寄附に関するお問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

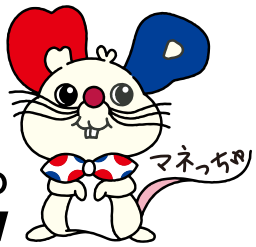
頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　https://www.kp-c.co.jp

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容
①舞台の企画・制作マネージメント
②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング
④舞台・イベントの運営



MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095　FAX:(052)508-5097　Web:www.mane-pro.com　E-mail:mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社